

○久下 裕司¹

¹北大アイソトープ総合セ

PET・SPECT といった核医学イメージング法は、適切な放射性薬剤を用いることにより、様々な分子・細胞機能をイメージングできる。この特長を生かせば、**CT** 診断などの形態学的評価に比べ、より早期に詳細な病態評価が可能であり、早い段階での正確な治療効果判定・有効な治療法の選択が可能になるものと期待される。これらの観点から、核医学イメージングの治療効果評価・治療戦略への応用が注目され、**¹⁸F-FDG** を初めとする種々の放射性薬剤を用いた活発な研究が展開されている。がんの治療戦略に関しては、**¹⁸F-FDG** 以外ではアミノ酸代謝や、細胞増殖能の評価に優れる核酸代謝、さらには低酸素、アポトーシス、血管新生などのイメージングが検討されている。心臓・循環器系疾患に関しては、心筋血流イメージングが広く利用されているほか、交感神経伝達機能、アポトーシスイメージング、血管新生などのイメージングも検討されている。また、脳神経系疾患に関しては、各種の神経伝達系イメージングのほか、アミロイドイメージングなどが期待されている。

本シンポジウムでは、低酸素、アポトーシスイメージング用の放射性薬剤に焦点を当て、最近の研究の動向を概説するとともに、我々の実験結果を紹介し、“治療戦略に役立つ放射性薬剤”、“治療戦略に必要なとされる放射性薬剤”について議論したい。